

令和4年度第1回山陽小野田市文化財審議会 議事録

- 日 時 令和4年12月21日(水曜日)午前9時30分から午前11時まで
- 場 所 山陽小野田市中央図書館 第一会議室
- 出席委員 磯部吉秀委員、内田陽三委員、徳重壽美雄委員、
田畑直彦委員、山本明史委員
- 欠席委員 松永保美委員
- 事務局 市教育委員会 藤山教育部長、船林社会教育課長、安藤係長、藤上主事
市歴史民俗資料館 若山館長、溝口学芸員
- 会議次第
 - 1 開会のことば
 - 2 教育部長あいさつ
 - 3 議 題
 - (1) 国史跡「周防灘干拓遺跡高泊開作浜五挺唐樋」について
 - 1 保存活用計画策定について
 - 2 浜五挺唐樋に関する文献資料の調査成果について
 - (2) 「旦の皿山」について
 - 1 講演 『考古学からみた「旦の皿山」の現状と課題について』
山口大学埋蔵文化財助教 田畑直彦氏
 - 2 今後の保存・活用について
 - 4 報 告
 - (1) 山陽小野田市内在住の個人所有「絹本著色雪舟等楊像」
国の重要文化財（絵画）に指定へ
 - 5 その他

事務局 おはようございます。定刻より少し早いですけれども、皆さんお集りになりましたので、進めさせていただきたいと思います。ただいまから令和4年度第1回山陽小野田市文化財審議会を開会いたします。議事に入るまで司会を務めます、社会教育課の安藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本審議会は山陽小野田市執行機関の附属機関に属しますので、会議の公開に関する要綱により、議事録をホームページで公表させていただきます。また、本審議会規則第3条第3項にありますように、本日は委員6名中5名の委員の御出席で過半数となっておりますので、本会議が成立しますことをお伝えいたします。次第に入る前に資料配布の確認でございます。皆様に事前に郵送させていただいております資料、お手元に御準備いただけてますでしょうか。議事1の保存活用計画策定について、それと田畑委員からの資料。考古学から見た小野田の硫酸瓶、こちらを事前に配布しております。また、本日机の上に置かせていただいております次第、それと窯のまちの冊子、こちらが本日の議事の資料として使わせていただきます。もし、御不足の方がいらっしゃいましたらお声がけをお願いします。よろしいでしょうか。ありがとうございます。では、次第2教育部長挨拶。藤山教育部長が御挨拶を申し上げます。

<教育部長あいさつ>

事務局 それでは議事に入ります。本審議会規則第3条第2項にありますように、会議の議長は会長をもって充てるとありますので、ここからは内田会長に議長をお願いいたします。

議長 皆様おはようございます。限られた時間ですので、皆様から貴重な意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。早速ですが、議題1「国史跡周防灘干拓遺跡高泊開作浜五挺唐樋」についてということで、今回は事務局より事前に資料配布があり、委員の皆様も事前に御一読いただいているかと思っております。今年度から浜五挺唐樋保存活用計画策定の準備を進められています。策定のために委員会が設置されて構成についてそちらの方の委員会で協議が重ねられています。本会議ではその策定委員会での協議内容を含めて御報告いただき、文化財審議会からの意見がありましたら、述べていただきたいと思います。それでは事務局より第1回策定委員会の御報告をお願いいたします。

事務局 はい、では私の方から御説明いたします。事前に配布をいたしました、議事(1)ー1「保存活用計画策定について」の資料をお手元に御準備をお願いいたします。まず1ページを御覧ください。先ほど藤山部長より申し上げましたが、今年度から2か年継続事業で浜五挺唐樋保存活用計画策定に向けて取り組んでいます。策定にあたり委員会を設置いたしました。委員名簿を載せております。委員は6名です。浜五挺唐樋が山口市名田島南蛮樋と同一の国指定を受けており、名田島南蛮樋整備委員会と同一の委員とすることの文化庁の助言により、委員を選定しております。今年度第1回計画策定委員会は10月13日に開催いたしました。2ページを御覧ください。保存活用計画で今年度主に協議をする前半部分の目次構成案でございます。史跡の本質的価値以外について完成に近い状態に持っていきたいと考えています。2年目令和5年度は第5章までの章立てを継続させた内容で、新たにコンサルタント会社に第6章以降の作成と取りまとめの業務を委託する予定としております。第4章の先行研究

について、後ほどの議事でも上がりますが、新たな見解も出てきておりますので、本日皆様に御意見をいただきたいと思っております。続いて5ページを御覧ください。浜五挺唐樋が国指定を受けた時の状況について御説明いたします。史跡の指定に至る経緯は表のとおりです。平成元年までは樋門として使用されており、隣接地に近代的な樋門が完成したことで、排水路がコンクリートで閉鎖され、樋門として使用されなくなりました。それ以降史跡としての価値づけが一気に加速し、市指定、県指定を経て平成8年に国史跡に指定されました。以降は計画策定をしていません。計画的な保存管理もできておりません。また、測量調査についても平成3年度に実施をしておりますが、十分なものではないため、今年度から保存活用計画策定に向けた1年目の事業として測量業務、図化業務を完了したところです。また、指定時に石切りによる精緻な構造が重要であり、保存を図るべきと示されていますが、その後の詳しい調査がなされていません。その他にも当時のままの状態を保存を図るべき箇所や本質的価値を洗い直す観点から保存活用計画策定に向けた文献調査や資料収集を始めております。続いて8ページを御覧ください。ここからは前のスライドを見ていただきながら御説明をしたいと思います。浜五挺唐樋の写真を映しております。以前まで汚泥がかなり溜まっておりました。1m半弱汚泥が溜まっておりまして、昨年度浚渫を行いました。このように招き戸の奥一つずつの五挺がすっきりと見えている状態です。これに合わせて、招き戸とロクロも浚渫に合わせて更新をしております。課題として挙げられるものがこちらの切り石が大変精緻な構造であり、当時の土木技術の到達点をよく示している大変貴重なものであると指定の理由にもなっておりますが、石積みの調査が実施されておられません。一部石に亀裂箇所も見られ、今後調査の必要があると思われまします。また、招き戸、ロクロの木製部分の修復につきましては、地元工務店の経験に基づき、実施をしておりますが、こちらの木の部分についても、今後は木製品であるため、経年による劣化が必ず生じてまいります。計画的な更新がこちらにも必要になってまいります。また、裏面の方の遊水地側ですが、今使っているようにも見えますが、中の排水路をコンクリートで閉鎖をされております。一部コンクリートが劣化をし、遊水地側にかかなり水が流れ出てきている状況でございます。先ほどの浚渫の時に泥を除けましたので、中が全部見えましたが、この中の一番西側の奥のコンクリートの部分に亀裂が入っておりまして、遊水地側の方に水が流れこんでいるという状況です。また、西側に岩盤が露出をしております。当初八幡山麓を掘削して堅固な樋門を新設しております。その当時の岩盤が露出をしております。この岩盤は受け盤の状態でありまして、摂理や亀裂が一部出ており、岩盤の一部に緩みが認められているということで専門の先生にも御指摘をいただいております。以上が現状と課題でございます。またこれまで整備を進めておりますが、国指定以降こちらの史跡の範囲の中に階段を設置し、史跡の中の草取りや通常の維持管理ができるよう階段を設けました。また看板を設置するなど、国史跡指定に合わせて整備を進めております。また、活用の現状ですが、学校での郷土学習や地域学校と連携した協働活動に積極的に取り組んでいます。本市のまちづくりの原点とも言えるこの史跡を、周辺の地域資源と一体利用できるよう観光部局とも連携した事業展開を現在推進しております。以上でございます。

議長 はい、事務局からの御説明ありがとうございました。それでは何か委員の方から御意見等ありますでしょうか。

委員 今ちょっとありましたように、八幡宮側の岩盤というか元々の岩盤を使って作られているということで、先ほどもあったように亀裂等も入ってくることを知ること今後、岩盤そのものが礫岩とか泥岩とかそういうような堆積岩なわけで、結構地震とかのどうなのかなという気がしているのですが

事務局 委員のお話の中で西側の岩盤については地質学の先生にも現地を何度か見ていただいたのですが、画面上でもわかるかもしれませんが、史跡の範囲に沿って、南から北へ20度傾斜している状況で、実はこれが遊水地側にも続いておりまして、今ちょっと切れているのですが、史跡の海側から遊水地側にかけて20度傾斜をしながら下がっている地層になっているということで、委員が先ほど言われたような礫岩や泥岩の互層である。互いに層が重なり合っているということで、こちらについても第1回の際に議論はなされておりませんが、史跡の範囲内のことですので、今後の状況をどのようにしていくか。現状のまま保たせるように整備をするのか、崩れるのをただ待つのみなのかそのあたりをもう少し議論を進めていかないといけない箇所ではございます。

議長 はい、ありがとうございます。他にお気づきのことはないでしょうか。

委員 いいですか。招き戸のところなのですが、南蛮樋と唐樋との違いというのが、子どもたちにはっきりわかるような、そしてバランスが南蛮樋の方が巻き上げてやるんですけども、当時これが実際に利用されておったときの状況というのがはっきりわかるようになっておるかということと、それからコンクリートのところというのは新しくやり替えたのだと思いますが、その辺の状況というのはなるべく昔のままにしておきたいと思うのですが、それはしょうがないと思いますが、この辺りはどうなのでしょう。実際は使われていないのですが、その辺の状況というのはどうなのでしょう。実際はでも少しでも子どもたちにそれを説明できるような、大人の方は一応概念でわかりますが、南蛮樋と唐樋の違いとかというのはどうなんでしょうかね。子どもたちが見に来るでしょうけど。

委員 付け加えでよろしいでしょうか。実際にこの唐樋が史跡とかの動きになる前の実際に動いていた頃の動画であるとか写真であるとかそういったものは残されているのでしょうか。そういうのがあるととてもいいかなと思います。

事務局 今委員がおっしゃった件ですが、写真につきましては現在調査中と言いますか、持っていらっしゃる方はいませんかとお声がけをしている状況ですが、資料館の収蔵資料にはありません。あと動画についても同様にありますので、地元の方を中心に古い唐樋の写真がないかとお声がけしている最中です。

事務局 委員からいただいた御意見の中で、今現状として地元の高泊小学校が高泊開作の郷土学習のためにここの唐樋を訪れているということはよく聞きます。現地に行かれてやはりわかりにくいという声も聞きます。目で見て今動いている訳ではないので、どういふ風な仕組みで樋門として使われていたのか、やはり今の段階ではわかりにくいという話もよく聞きます。それで、唐樋と南蛮樋の違いは、唐樋については自然の潮の干満によって招き戸が上がったり下がったりします。南蛮樋については樋守りがいて、板を上げたり下げたりします。自然の流れによるわけではなく、人の手で巻き上げることです。構造的には違うというところをもう少し皆さんにわかりやすく、示してい

ないといけないなというのは、今回の活用の計画の中でも出していけるように挙げております。

委員 巻き上げはあるのですか。

事務局 唐樋が巻き上げではなくて自然の干満の高さで上がったり下がったりしますので、巻き上げはついておりませんが、緊急的に招き戸を上げるためのロクロは上にあります。ロクロで巻き上げる時もあったと思います。

委員 ここだけなんですよね。その辺のことはつきり子どもたちにせつかく見に来た時に説明できるような状態であるかをお聞きしたかったんです。

事務局 ありがとうございます。

委員 いいですか。私は地元に住んでいるのですが、今まで私は高泊小学校の子どもたちを連れて度々来たのですが、今年の10月に隣の高千帆小学校の子どもを連れて2日間続けて行きました。いいことだなと思って。そして、いろんな話をしていたら、高泊神社との絡みもありますので、そしたら高泊神社の氏子だとか。だから今までお神輿なんかを担ぎに来ていたんだなとそういうことも勉強になってとてもよかったです。その中で、さきほど委員も言われたのですが、子どもたちが見てどこまでがそのままあって、どこからどこが新しいのかとか、そういったことを聞きます。札に書いてあるとか、私の知っている範囲では言えるのですが、後々指定された後ここをいじりましたとか、ここを直しましたとかそういったことが少しずつ経年的に出てくると、あそこが変わったとか、昔の三挺が五挺に変わったとかそういった経過がわかるといいのではないかと。そういったことが説明でもあるといいのではないかと思います。

事務局 ありがとうございます。委員がおっしゃった高千帆小学校の話は私も存じております。今回かなりの人数が小学校から歩いて訪れたということで、とてもいいことだなと、郷土学習にとっても良い傾向が出てきているなと思っております。今言われた残すべきところと、変えていかないといけないところ。一番わかりやすいのが、ロクロと招き戸はどうしても当時のままではないです。ここは経年劣化しますので、変えていかないといけない、新しいところ。ただ、今回の保存活用計画の中で示していかないといけないところは本質的価値、当時のままだこを大事に残していくかと更新していかないといけない新しいもの。そこの区別が計画の中でも必要になってくると思います。文化庁からも指示が出ておりますが、やはり、切り石の部分が当時からのもの。また、岩盤もおそらくその当時そこから切り抜いて切貫唐樋と言われるほどのものですから、当時のものだと思います。そういった当時から残されているものと現状を復旧しながら使い続けているものと、そのすみ分けは必要になってくると思います。そこをしっかり子どもたちにもわかるような資料作成も努めてまいりたいと思います。

議長 今出た御意見等を策定委員会の方でしっかり聞いていただければと思います。それでは、議題(1)－2「浜五挺唐樋に関する文献資料の調査成果について」ということで歴史民俗資料館の学芸員の方からお願いいたします。

事務局 私の方からお話させていただくのは、浜五挺唐樋に関する保存活用の策定につきまして、新たに歴史的な文献資料の調査を行いまして、先ほど事務局より申しましたように、従来言われている見解とは異なる、現段階では推測というふうにさせていただきたいのですが、そういったものを紹介させていただく場を今回、設けさせていただきま

した。それでは御説明させていただきます。今回私がお話するのは配布しました資料2ページの保存活用計画目次構成のうちの第4章にあたる部分になります。これを時間をかけてまとめ直したいという意図もありますので、御意見をいただければと思います。私の話では10・11ページ以降に次第と今日出します古文書の翻刻等を出しておりますので、画像よりもレジュメを見ていただきながらの方がわかりやすいかなと思っております。それではまず先行研究をまとめていきますと、まず、現在の浜五挺唐樋は寛文8年の高泊開作の汐留工事の際に、より堅固な樋門を当嶋八幡宮下の岸壁を切貫き、三挺の樋門を作ったということ。切貫唐樋ともいうということ。当時、樋門は2箇所あったということ。それと安政4年に三挺から五挺へ改修されたということが歴史的な評価であるというふうに私は考えておりますが、初見資料というのは高泊開作の造成記録をまとめた『高泊御開作新田記』という資料の最後で、今、線引っ張っている箇所に先ほどからありますように高泊八幡山下の岩石を切り、裁断したと書いていますが、現在の当嶋八幡宮下の岩壁を裁断したと書かれておまして、先ほどから、委員からも御意見がありましたように、江戸時代というか日本の樋門の中では南蛮樋と唐樋があるということで、構造上は唐樋の方は自然の潮の満ち引きによって開いたりする、南蛮樋の方は人力で開いたりするという構造が決定的な違いだと思いますが、これを見ていただきますと、唐樋を作ったというのが書かれていない。そういったところから調査をしていきました。最初に調査をしたのが山口県文書館所蔵の『普請要録』という資料の中に浜五挺唐樋のことが書かれておまして、これは先ほどお話しした安政4年の三挺から五挺へ改修した時の記述がまとめられているものです。レジュメを見ていただきますと、明らかに南蛮樋から唐樋に改修されたというふうに書かれております。三挺から五挺へなったときに南蛮樋から唐樋に変えたのではないかということがこの資料で推測されます。一番わかりやすいのが『普請要録』の図です。左側が北になります。この左半分にある真ん中の赤い道が現在の山陽小野田市の横土手というところになります。下にありますのが当嶋八幡宮です。ここに書かれているのが浜五挺唐樋なのですが、東南蛮樋というふうに書かれております。そして2つあるうちのもう一つがここの西南蛮樋と書かれておまして、ここは昭和20年の空襲の際に潰れたというふうに言われております。安政4年の時の改修のことが分かるのですが、一つ推測として、南蛮樋から唐樋に変わったのではないかと推測していくと、史料5として『作家一男旧蔵文書』といって、当館が収蔵している古文書ですけども、これによると「御開作汐土手南蛮樋石垣損所」とありまして、こういったものも史料としてありますが、史料6の地元の資料でも、「一本切貫南蛮樋招戸六枚」というふうに書かれておりますので、地元の資料でも安政4年の改修の前には南蛮樋というふうに出てくる史料もつけられたということが一つの成果なのかなと思っております。続いて、『粟屋徹家文書』と言って今年度から当館に寄託された史料なのですが、これが安政4年の改修の際に、地元の名主から畔頭の役職をしているところなのですが、「高泊村切貫五双唐樋御普請二付同断」として、いわゆる寄付をしたというふうに書かれておりますので、その改修の際には地元の有志から寄付金も賄われていたということがわかるとおもいますので、新たな価値づけとしましては安政4年に三挺から五挺に改修された際に一つ南蛮樋から唐樋へ居替えされたのではないかと。そしてこれが現在

の浜五挺唐樋の姿ではないかということ。それから改修の際には地元からの寄付金で賄われていたということが現在の新たな価値づけということで調査を進めて参ります。これを行った際に策定委員会の委員さんから意見をいただいたのが、『普請要録』には三挺時代と五挺に改修したときの断面図がありますので、そのあたりからどこからどこまでを改修したのかということが読み取れるのではないかとということで再度翻刻、また調査を進めております。現在、部分ごとの寸法もありますので、それと照らし合わせながら安政4年の姿が現在どのくらい残されているのかも確認できると思います。3月1日の2回目に向けてはこの『普請要録』の平面図の部分を重視した報告になろうと思います。もう一つ南蛮樋から唐樋というのは一般的に考えられている流れとは逆のようで、大体南蛮樋というのは技術が新しいということでしたので、そういった中でこれまでの樋門の評価も立証できれば、変わっていくのではないかと御意見をいただくことができました。以上で報告を終わります。

- 議長 委員 ありがとうございます。今の調査成果について委員より何か御意見等ございますか。南蛮樋は上げたりしますよね。南蛮樋から唐樋にしたということは使った石ですよ。それが固い石であればどこかに残っていて、それが資料的なものになりそうだなと思うのだけど捨ててしまうものなんじゃないかな。
- 事務局 現在の報告書を確認しますと、遊水地側のところに溝のようなものが確認できました。ただ、海側の方にはそういった溝は確認できておりません。
- 委員 そうするともともと使っていた南蛮樋の石を組み替えたというのも可能性としては考えられるのですか。
- 事務局 もちろんその可能性はゼロではないと思います。一番改修の際の主要な文献は『普請要録』ですので、翻刻をし直して解説等々も見直したいなと思います。
- 委員 遊水地に入ってくる水は自然に流れ込むのですか。名田島の方は入ってくるところが唐樋になっている。海側に出るところが南蛮樋で整備されている。名田島の遊水地に入ってくるところは唐樋が設けられている。高泊の方は遊水地に入ってくる水もそこにはさっと流れているということなんですかね。
- 事務局 それは当時のということですか。それはちょっとそこまではつきりわかりませんが、おそらく遊水地側に溜まったものが流れていたのだと思います。
- 事務局 歴史的にみると今の浜五挺唐樋自体は高泊開作地の排水門ですので、昔はずっと用水を出していたと思いますので、そのあたりは平成元年以降に変わった可能性が高いと思いますので、そのあたりも含めて調査させていただければと思います。
- 議長 他に御意見等ございますか。それでは第2回の保存活用計画策定委員会は3月1日に開催されるということですので、その委員会が終了した後にこの文化財審議会も開催されるようですので、改めて皆さんからいただいた御意見等を基に策定委員会の方でいろいろ話されると思います。その報告がされると思います。よろしく願いいたします。それでは議事の2に入らせていただきます。皿山について、まず事務局から説明をお願いいたします。

事務局 且の皿山について御説明をさせていただきます。まず、お手元に今日お配りしましたふるさと文化遺産窯のまちの資料を御覧いただけますでしょうか。こちらの5ページをお開きいただきたいのですが、且の皿山の歴史を紹介しております。昭和30年代まで多くの製陶所が操業して、硫酸瓶を代表する様々な製品が作られ、一大地場産業となりました。現在もこの地域には登り窯や陶土の製造工程が分かる施設バック・オロ、また不良品となった瓶を積んでできる瓶垣など、当時活気があふれていた窯業のまちの記憶が蘇ってくるような遺構が数多く残されています。委員の皆様には事前に聞き取りとして且の皿山についての御意見をいただきました。これから配布をさせていただきます。では御意見をいただいた委員から、少し補足も含めて御説明をお願いしてもよろしいでしょうか。

委員 最初のところに記入しているのは後ほど説明があるのかなと思います。そして下のところはガラスと今までの事、窯のまちガラスはもちろん新しいですが逆にスポットライトを浴びたばかりに、またこっちの方もすぐ目を向けてきて認知度がかなり上がったと思うのですが、それを何ではかるかと言ったら現地に見に来る人は少しは増えたかなとちょっと気になります。それから浜五挺唐樋のことですけども、人集めとか人が来たからどうということではないのですが、もっとよりよくするために何かイベントをすとかそういうことがあるといいのかな、そのままじっとしておくのがいいのかなと思っています。

事務局 ありがとうございます。はじめに、ふるさと文化遺産登録後に実施された何か企画等がございますかということですが、今日お配りした次第の資料の1ページ目に写真付きの資料をつけております。まず歴史民俗資料館で現在、窯のまちという企画展を開催しております。こちらは窯業の歴史ですので、古代の須恵器から現在のガラスまで、目で見て、触れることはできませんが、目で見て窯業の歴史を学ぶことができる企画展となっております。またそれに合わせた特別講演会を田畑委員を講師にお招きして、開催をいたしました。また、且の皿山ウォークを観光協会と共催で実施をしまして、こちらも田畑委員にガイドをしていただき、ちょっと雨の中大変だったのですが、皆様とても充実したウォークだったと伺っております。参加者が40代から70代と幅広くて7割の方が且の皿山に初めてきたと言われていらっしゃいました。半分以上が市内にお住まいの方なのですが、改めて長い間小野田にいますが、登り窯を初めて見ました。とか市内に住んでいながら、初めて訪れる場所で、改めて市内の良さがわかりました。とか気づいていない魅力が今日わかって、この魅力をほかの人にも伝えたいというようなアンケートの答えをいただきました。まだまだ市内に住んでいらっしゃる方にも伝えきれていないこの且の皿山の魅力があるんだなというのを私たちも運営側として実感したところですよ。それから小野田地域交流センターでは窯のまちの講座を歴史民俗資料館館長に行っていただきました。皆さんにお配りしています窯のまちの資料を現在販売しておりまして、購入された方に硫酸瓶のペーパークラフトをプレゼントでお渡ししております。続いてですが、2番目のガラスによるまちづくりに伴っての来訪者がどれくらい増えているのかということで、実際現地で確認を取っている訳ではないのでわかりませんが、CLASSGLASS のブランドに向けた背景として、且の皿山の瓶垣などの写真がよく使われています。おそらくそういったところで、これはどこなの

だろうと見られた方が訪れるケースもあるかなと、はっきりとは申せませんが、増えてきているのではないかなと思います。1点、このトライアングルという山口県の情報誌がありまして、これが2021年の5月号の山口ゆる旅というところに且の皿山の特集記事が4ページにわたって掲載をされました。このときに地元の方にお伺いしたら、かなりいらっしゃっていたというのをお聞きしました。すごくたくさん来られるので、一人ずつどこから来られたのか等お話をしながら、増えたのでびっくりしたというのはおっしゃっていました。そういった効果的な情報発信や魅力の出し方によって、やはりこの且の皿山ももつと光が当たっていい場所ではないかなと感じております。以上です。

議長 はい、ありがとうございます。それではここで且の皿山の現状と課題についてということでお話をどうぞよろしくお願いします。

委員 田畑でございます。先ほど御紹介をいただきましたように、12月3日に歴史民俗資料館の方で開館40周年記念ということと窯のまちの登録を記念した形で考古学から見た硫酸瓶という講演をさせていただきました。先立つ11月23日に且の皿山ウォークでも講師を務めさせていただきました。あらためて皿山の現地に行ったり、勉強させていただきました。その過程で私なりに今後の課題と感じたことを中心に話をさせていただきました。今後の課題として、3つあげさせていただきます。考古学的な記録の作成ということなのですが、その必要性を強く痛感したきっかけがございました。そのことを講演会ではお話をさせていただきました。大阪市中之島の発掘調査で硫酸瓶と思われるつぼ型の容器が発掘されました。その中に小野田産であると明らかな硫酸瓶と小野田産ではないかと思われる瓶が発見されました。こちらが瓶の実測図なのですが、日本の考古学では向かって右側に断面図を示して、左側に外面図そのように表現するのがルールになっています。これは元々どういう風に作成したかという原寸大で正確に計測をして、断面の厚さを計測してこのような図面を作成するわけです。基本的に同じルールで作成していますので、こうした図面があれば、図面だけで大きさであるとか、容量であるとかそういったことを正確に比較することができます。この中で小野田産であることが明らかなのはここにあるいわゆるちょっと小さくて見えにくいですが、ねじが切ってあってこういった瓶です。それとともに、口径はほぼ同じですが、中にねじが切っていないものです。通常焼酎瓶と小野田で言われますが、口径の大きさと形状から言っても硫酸瓶だろうと思われるものです。また関連しまして、製陶所を示す刻印を持ったものがあります。このように拓本をとることで、比較的正確な形等を記録することができます。このような形で大阪で瓶の報告をされているんですけども、まず私がここで非常に問題だなと思ったのは、小野田においては考古学的な観点から図化記録した瓶が私の知っている限りではまだないということですが、最初に申し上げたように考古学的な観点からについて可能性は高いと思うのですが、断定することができません。なのでこの瓶を拝見した際に、小野田における瓶について考古学的な記録の作成、これをしっかり行っていく必要があるのではないかと痛感した訳であります。それと関連しまして、製陶所を示す刻印ですが、形態の説明については時間が無いのでまた資料を御覧いただければと思うのですが、小

野田の製陶所である可能性のある刻印を持つものが複数認められています。こちらは従来でも小野田で言われていますように、石見焼の陶工が関与していたということで、こういったねじを切っていないですね。私は今改めて検討しますと石見の陶工が関わっていた可能性が形態的にも高いのかなと思います。ひいては小野田産である可能性は十分断定はできませんけれども、そのように考えております。こちらが少し関連しますが、大阪で作られた硫酸瓶ですね。小野田の方とは形も全然違うことが分かりますと思います。こちらも同じくねじがきっていない、ねじ以外は通常の硫酸瓶と同じ形ですが、やはり三好製陶所の可能性があると思うものがみつかっています。こちらは確実に小野田産である可能性が極めて高い、中にねじがきつてあるそういったものがあります。私も見に行った時に非常に悩みました。これを見ていただいても、中のねじ以外、形が同じであるとお分かりになると思います。把手だけのものについても、津田製陶所ですね。これも古い製陶所です。こちらがねじをきっていない瓶の蓋で使われていた蓋ですね。詳細は割愛いたします。

今、考古学的に瓶は3つの種類に分けられると思っておりますので、その点を御紹介したいと思っております。一番左側にあるのが人の手で3段階に分けて作られていたと思われるものでして、特徴は胴の全体にロクロでなでたような跡があつてこの瓶自体は極端ですが、傾斜転換点がすごく丸っこい、あまりメリハリのない形をしたものですね。現在展示されているものではもう少しメリハリのある形をしていますが、特徴としては全部撫でている、3段階に分けて成形をしていたものです。その次の段階のものが昭和初期頃になるといわゆる胴から下のひじりの部分は従来の方法で作って、胴の部分は製瓶機を応用したものが、よく見ますとここだけ撫でたような跡があつてここは型のようなものがみえますが、昭和初期から戦前のものだと現在モニュメント等で一番よくこの手の瓶が使われているようです。最後はこちらです。こちらは土管機等で抜いたものを石膏型の中に入れて作った瓶ですが、特徴としてはこの部分にひじりと胴と中継ぎを撫でた痕跡はなくて、非常にシャープな形をしています。当然撫でた痕跡はない。石膏型で作ったものであると私は考えております。

2つ目ですが、先ほどの1点目と関連する課題なのですが、小野田以外で小野田産とみられる瓶を見てきました。しかし、考古学的な記録を取っていないことで、正確に突き合わせて検討することができていません。1つ目の考古学的な記録を作成した上で実際にどのような形で流通をしていたのか、調査をしていく必要があると思っております。そして、3つ目ですが、関連施設及び保存と活用でございます。先に活用の点ですが、且の皿山ウォークにあたりまして、このようなマップを私の方で作らせていただきました。その意図というのは私山口市在住ですので、正直場所が非常にわかりにくいという点があつたのと、焼き物が好きな方は結構一人でみて歩きたいという方がたくさんいらっしゃいます。意図としては一人でも散策できるようなマップが作れたらと思われました。あと、最寄り駅が目出駅ですので、昨今いわれております、小野田線の利用促進にも繋がればいいのではないかと。そのような想いから試作を試みていただきました。こういったようなものを今後も希望される方も多いので、もう少しアレンジをして公開をされたいのではないかとというふうに思いました。また埋蔵文化財包蔵地としての取り扱いですが、目安として1945年以前に構築されたものになります。窯の

まちの6ページを御覧ください。こちらの左側に河野製陶所。近代化産業遺産に登録されています。これは昭和15年ごろの写真であります。現在もこの登り窯の煙突、それからバック、オロ等が残存しています。また私が見たところ、少なからず地下に埋まっている部分があるように思います。このようにとりあえずの目安で、関連施設についての埋蔵文化財包蔵地としての市の取り扱いについて検討する必要があるのではないか。その観点から言えば対象となってくるのは他にも複数あるわけですが、そういったほかの場所についても学術的な調査をした上で埋蔵文化財包蔵地としての取り扱いを検討し、保護を図っていく必要があると思います。一度壊されてしまったら元には戻すことができません。最低でも記録保存する。このような観点からは検討が必要ではないかと考古学の立場からはそのように考えております。簡単ですけども、以上です。ありがとうございました。

議長 ありがとうございました。活用や保存に向けての具体的な意見もあったかと思えます。埋蔵文化財包蔵地としての今後取り扱いが必要ではないかといわれました。且の皿山についての委員からの意見があるわけですけど、保存活用含めてあればよろしくお願いいいたします。

委員 考古学からみた硫酸瓶の分析、とても面白く聞かせていただきました。これがすべてできれば小野田の硫酸瓶がどのように広がっていったか、ひいては日本の近代化を象徴するものだと思うのでとても面白いなと思いました。それで一つお聞きしたいのですが、且の皿山ウォークのマップがあったかと思いますが、あのコースというのはどれくらいで歩けるものなのですか。一日で歩いて行けるものなのでしょうか。

委員 その部分について説明していませんでしたが、補足で説明いたします。行程が4.1 kmです。1時間15分～30分多少休憩等も含めてのマップですね。気軽に歩けるコースです。

委員 ありがとうございました。今県下ではまち歩きの記事がたくさんあるんですけども、硫酸瓶を活用したまち歩きというのもとても魅力があるなと思います。やっぱり現地で説明を聞きながら、現地でしか感じられないこともありますし、もうひとつは資料館で硫酸瓶などの変遷とかじっくり学ぶ場があるといいかなと思います。そのことは先程の浜五挺唐樋についても同じで、あそこの残された現地で学ぶ、現地でしか感じられないこと。そしてそこで説明を聞き、今度は資料館の方では唐樋をつかって干拓がどういふふうに行われたかとか。山口県では開作がたくさんありますが、象徴する大事な遺跡でありますし、資料もたくさん残っています。先程南蛮樋から唐樋へというような文献調査で新たな視点が加わった。こういうのをですね資料館の方で広く伝えていただければいいかなと思います。それと近世硫酸瓶といえば近代。光を当てるととても大事な遺跡、資料となると思いますので、どうぞよろしくお願いいいたします。

委員 先程言い忘れた点がございました。少し補足をさせていただきます。保存と活用にあたってなのですが、且の皿山ウォーク歩いた部分で気づいたことなのですが、瓶垣などですね。窯業の里小野田などで記録のあるものを実際に現地で見たところ、藪などに覆われて本来瓶垣があるのだけれどもよく見えないという箇所も複数ありました。それから瓶垣などは使われている瓶自体は古いのですが、構築年はこの三好邸の瓶垣は比

較的新しいものもあります。また瓶垣は山陽小野田独特の景観でもありますので、景観法による観点からの保全を検討されてみてはいかがかなと思っております。以上です。

議長 ありがとうございます。事務局から何かございますか。

事務局 はい、委員の皆様御意見ありがとうございました。私も且の皿山ウォークに参加させていただいて、先生とはコースの段階からいろいろと一緒にどういうところを回ろうかという御相談をしながら決めさせていただいたのですが、やはり有名な瓶垣とか且の登り窯とかそういう構造物だけではない、まち歩きによって見えるまちに馴染んでいる皿山の歴史というのは、やはり歩くことによって気づくというのは私自身も感じましたので、すぐ点でポイント的に行くのではなく、委員が作っていただいたマップを使ってまち全体を皿山を感じながら歩くというのが、とても今回のウォークでとても良い地域資源ができたのではないかなと思っておりますので、そうするにあたってはやはり保存が大事になってくると思います。先ほどありましたように、藪に覆われて見えないとか通常の維持管理がとても課題になっています。そこがこれからの且の皿山の活用については一番の課題になってくる点ではないかと思えます。所有者さんとの協議や今後の在り方についてももう少し踏み入って話をしていかないと、太刀打ちここが全く何もなくなってしまってもいけませんので、少しずつでも協議を進めていけたらいいなと思っております。景観法による観点からもというお話もありましたが、景観の保全団体に山陽小野田市もなっていますので、そのあたりも所管課と協議を進めていきたいと思っております。以上です。

議長 はい、よろしく願いいたします。それでは次第4「報告」に入ります。山陽小野田市内に在住の個人所有の『絹本著色雪舟等楊像』の国の重要文化財指定へということで事務局の方からよろしく願いいたします。

事務局 では、説明をいたします。本日お配りしました次第の中の3枚目を御覧ください。山陽小野田市内在住の個人所有『絹本著色雪舟等楊像』が国の重要文化財に指定へということです。11月18日金曜日に国の文化財審議会において文部科学大臣に対し、市内在住の方の絵が国の重要文化財に指定するように答申をされました。答申後は官報の告示を経て、正式な指定となり、指定が行われましたら本市初めての国指定重要文化財(絵画)となります。その次のページに写真を掲載しております。こちらが先ほど申しました『絹本著色雪舟等楊像』で雪舟の自画像の上にあります、雪舟から数えて5世の雲谷等与が雪舟 71 歳の自画像を模写し、天祐に賛を請うたこと明記されている。これがとても価値のあるということでこの度指定を受けております。こちらの絵画は個人の方が山口県立美術館に寄託をされています。現在はこの指定の調査にあたり、文化庁に貸し出し中ですのでございまして、来年度に県内でのお披露目として、山口県立美術館で展示をされる予定となっております。ぜひその際には皆様御覧いただければとおもいます。以上、報告でした。

議長 はい、報告ありがとうございました。それでは最後にその他ということで、事務局のほうから何かございますでしょうか。

事務局 現在、歴史民俗資料館の企画展「窯のまち」が開催中でございます。館長からもしよろしければ。

事務局 現在、ふるさと文化遺産登録記念と歴史民俗資料館開館40周年記念ということで、窯のまちという企画展を開催しております。12月26日から2月7日まで開催します。毎月第4土曜日にギャラリートークも開催しております。今、皆様が言われましたように、活用という点で資料館の方でも地図を作りながら、無料配布もしておりますので、後ほど見ていただけたらと思います。それから先程の件について少し補足させていただきますと、資料館の方にいろんなお客様が見えた時に旦の皿山を見学したいけどどのように行ったらいいかという問い合わせがとても多くあります。その時に私たちの方でも御案内するときに車で市内から来られる方が多くありまして、駐車場がありませんので御案内するのに大変苦労しているところもありますので、今後の課題の一つになるかなと思っております。後ほどお時間ありましたら、資料館の方にぜひお立ち寄りいただけたらと思います。よろしく願いいたします。

事務局 私の方も先日行きまして、歴史民俗資料館の方も一生懸命にアピールしておりますので、もしお時間があればぜひお越しいただければと思います。それから缶バッチ、職員が手作りで作っています。よくできておりまして、これを使わない手はないなと思っておりますし、硫酸瓶のペーパークラフト、これワードで作ったということでびっくりなんです。作ったら本当に硫酸瓶ができますので、もしお時間がありましたらよろしく願いいたします。

議長 はい、ありがとうございます。議事は終了いたしました。委員の皆様から御意見、お気づき等何かありますか。よろしいでしょうか。またお気づきのことがありましたら、事務局の方までお知らせください。それでは進行を事務局にお返しいたします。

事務局 会長ありがとうございます。先程の議事の中でもお伝えしましたが、次回開催は策定委員会が3月1日に開催されますので、開催された以降、おそらく3月中旬頃で設定させていただきたいと考えております。また、改めまして日程を調整させていただきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。本日はたくさん意見をいただきましてありがとうございました。今後の課題が山ほどありますが、また皆様方からの御意見を大切にこちらの方で協議を進めてまいりたいと思っております。本日は大変ありがとうございました。お疲れ様でした。